

鴨長明と登蓮法師

杉本 あゆみ

一、はじめに

鴨長明(久寿二(一一五五)年頃—建保四年閏六月十日(一二一六年七月二十六日))は、平安時代末期から鎌倉時代にかけての歌人であり、随筆家でもある。俗名はかものながあきら。禰宜・鴨長継の次男であり、位階は従五位下。菊大夫とも号した。

三大随筆の一つとされる『方丈記』や、仏教説話集である『発心集』、さらには歌論書『無名抄』を記したとされる。それらの長明の書には、要所所で度々、登蓮という僧が登場する。そこには長明の登蓮に対する並々ならぬ強い思いを感じ取ることが出来る。では、登蓮の立場から登蓮の長明観を考えてみると、登蓮の著書の存在が明らかになっ
ていないので、登蓮の気持ちを探ることは不可能に近い。本稿では、長明の書である『無名抄』『発心集』にある登蓮が登場している話を考察し、登蓮に対して長明が抱いていた感情について探りたい。

二、登蓮について

登蓮については、拙稿^(注一)でも触れているが、平安時代後期の歌人(中

古六歌仙のひとり)であり、勅撰集には『詞花和歌集』を初出として総計十九首入集、家集に『登蓮法師集』『登蓮法師恋百首』がある。生没年は未詳であるが、辞世の歌が『月詣和歌集』にある。以下に、辞世の歌を挙げておく。尚、本稿における和歌の引用は、特に注記しない限り、『新編国歌大観』による。

よしの山をのへの花や咲きぬらんまつをばおきてかかる白雲

(月詣和歌集・巻第二・二月〈附別部〉・登蓮・一一六)

この辞世の歌が寿永元(一一八二)年十一月に成立したとされる『月詣和歌集』に収められていることから、登蓮はそれ以前に没したと考えられる。

登蓮については述べられている資料が少なく、詳細を解明するのは難しいが、源頼政や西行とも交際があったようであり、また、『平家物語』延慶本巻四に平清盛が熊野詣の途次、秋津の里に至った際、通りすがりの登蓮と連歌の付合をして以来、その機知を愛でて扶持した話があり、さらに、登蓮はもと筑紫安楽寺の僧で、近年近江の阿弥陀寺に住持すると紹介されるが、彰考館文庫蔵『扶桑蒙求私注』には、

もと比叡山の僧で下山後、青蓮院和尚御房に芸能(歌)をもつて伺候していた際に、忠盛に出会ったという異伝がある。

さらに『源三位頼政集』三三二番歌、『林葉和歌集』一一六番歌、『禪林瘡葉集』八六番歌詞書に登蓮が鎮西に往き来していたことを記しており、安樂寺僧の立場から太宰府の天神説話を媒介した人物として注意すべきである。

一方、長明は先述のとおり、久寿二(一一五五)年頃から建保四(一二二六)年までの生存と考えられているので、長明と登蓮は、お互いに同じ時代を生きたと思われる。両者が会話を交わすことが可能であったか否かは定かではないが、木村健氏や紙宏行氏によれば、登蓮、長明ともに、長明の和歌の師である俊恵法師の歌林苑に参加していたようで、歌林苑の存在が互いを結びつけていた、もしくは長明が登蓮の存在を知るきっかけになっていたのではないか。そのような長明と登蓮の二人の関係性のもと、長明は『無名抄』の中の章段「ますほのすすき」「井手の山吹並びに蛙」「近代の歌体」や、『発心集』の「蓮花城、入水の事(卷三卷一八)」に登蓮を登場させている。以下にそれらを考察したい。

三、『無名抄』にある登蓮の話

長明は『無名抄』の中でも、数寄関連の主要な章段といえる「ますほのすすき」「井手の山吹並びに蛙」「近代の歌体」の三章段に登蓮を登場させている。以下に登蓮が登場した話を引用する。尚、テキストには、梅沢本を用いた。^(注三)

ますほのすすき

雨の降りける日、ある人のもとにおもふどちさしあつまりて、

ふるきことなんかたりいでたりけるつるでに、ますほのすすきといふはいかなるすゝきぞなどいひしろふほどに、ある老人のいはく、渡辺といふところにこそ、このことしりたる聖はありとき、侍りしかと、ほのくゝいひいでたりけり。

登蓮法師そのなかにありて、この事をきゝて、ことばすくになりて、又とふこともなく、あるじに、みのかさしはし給へといひければ、あやしとおもひながら、とりいでたりけり。物がたりをもきゝさして、みのうちき、わらぐつさしはきて、いそぎいでけるを、人々あやしがりて、そのゆへをとふ。渡辺へまかるなり。としごろいぶかしくおもひ給へし事をしれる人ありときゝて、いかでかたづねにまからざらむといふ。をどろきながら、さるにても、あめやめでいで給へといさめけれど、いではかなき事をもの給かな。命はわれも人も、あめのはれまなどまつべき事かは。何事もいましづかにとばかりいひすて、いにけり。いみじかりける数寄者なりかし。さて、ほいのごとくたづねあひて、とひきゝて、いみじうひさうしけり。

この事、第三代の弟子にて、つたへならひて侍り。このすゝき、をなじさまにてあまた侍り。ますほのすすき、まそをのすすき、まそうのすすきとて、みくさ侍なり。ますほのすすきといふは、ほのながくて一尺ばかりあるをいふ。かのますかゝみをば、万葉集には十寸のかゝみとかけるにて心うべし。まそをのすすきといふは、真麻の心なり。これは俊頼朝臣の哥にぞよみて侍る。まそをのいとをくりかけてと侍かとよ。いとなどのみだれたるやうなるなり。まそうのすすきとは、まことにすわう也といふ心也。ますわうのすすきといふべきを、ことばを略したるなり。色ふかきすすきの名なるべし。これ、古集などにたしかにみえたることなけれど、和哥のならひ、かやうのふることをもちるも、又よの

つねのこと也。人あまねくしらず。みだりにとくべからず。

この話の前半は、登蓮という僧が「ますほのすすき」という歌枕の詳細を確かめるためだけに、雨の中、「渡辺」という地にいるという聖の所まで走って聞きに行った（登蓮はゆうに二、三十キロメートルを走ったということになる）ことを、長明が「いみじかりける数寄者なりかし」とする数寄者逸話で、この話は『無名抄』以外にも、いくつかの書に記されており、それについては後述したい。

この話の後半では、長明が知り得た歌語「ますほのすすき」に関して詳しく述べられている。「ますほのすすき」には「ますほのすすき」、「まそをのすすき」、「まそうのすすき」と三種類あり、それぞれ、

・ますほのすすき

「ほのながくて一尺ばかりあるをいふ。かのますかゞみをば、万葉集には十寸のかゞみとかけるにて心うべし。」

（穂が長くて一尺ばかりあるものをいう。あのます鏡を万葉集では十寸の鏡と書いていることで理解すべきである。）

・まそをのすすき

「真麻の心なり。これは俊頼朝臣の哥にぞよみて侍る。まそをのいとをくりかけてと侍かとよ。いとなどのみだれたるやうなるなり。」

（真麻の意味である。これは源俊頼朝臣の和歌に詠んでいる。「まそをのいとをくりかけて」とあるのか。糸などが乱れているようなすすきである。）

・まそうのすすき

「まことにすわう也といふ心也。ますわうのすすきといふべきを、ことばを略したるなり。色ふかきすすきの名なるべし。これ、古集などにたしかにみえたることなけれど、和哥のならひ、かやうのふること

をもちゐるも、又よのつねのこと也。」

（まことに蘇芳色であるという意味である。真蘇芳のすすきというべきところを、言葉を略したのである。色濃すすきの名なのであろう。これは古い歌集などに確かに見えていることではないが、和歌の習慣として、このような古い言葉を用いることもまた世間に常にあることである。）

とされ、「ますほのすすき」の詳細について述べた後、最後に「人あまねくしらず。みだりにとくべからず。」と結んでいる。

長明はこれらの、もとは登蓮が自ら走って行って得た知識を何らかの形で譲り受け、よほど感動したのであろう、知識を忠実に再現し和歌を詠んだのである。鎌倉時代後期の私撰和歌集である『夫木和歌抄』には、次の長明作の和歌を三首挙げて、これを「伊勢記」のものとしている。

鴨長明

四四二〇 日をへつといとますほの花すすき袂ゆたげに人まね

くらし

四四二一 しろたへのますほの糸をくりさらしまがきにさぼすは

なのをすすき

四四二二 秋ふるす霜より後のきくの色をかねてますほのをばな

にぞみる

此三首歌伊勢記云、ゆきつきてみればかしこを二見里と云云さるほどなる板屋のをかしげにすみなせるに、いろいろのせんざいどもさかり過ぎたれど、よしある人のあたりとみえたり、時雨などいふばかりにはあらで、はれまなかりければ、いたづらにこもりあたる、なぐさめがてら、せんざいなる花の色色

ひとふさづつとりならべて見るついでに、三種のすきといふこと人の語りしをおもひいでて、心みによめると云云

これらの三首を詳しく見てみると、

日をへつついとどますほの花すすき袂ゆたげに人まねくらし

(日を経て一層赤みが増す薄の花穂、その袂豊かに人を招くらしい。)

この歌での「ますほの花すすき」は、先に述べた「まそこのすすき」、蘇芳色、真蘇色(赤い色、紅色の意)を用い、「袂」は花穂を衣の袂に例えたものである。「ゆたげ」は「豊か」の意である。

しろたへのますほの糸をくりさらしまがきにさぼすはなのをすすき
(白いますほの薄の糸を繰って晒して垣根に干したような花薄だ。)

この歌は、平安時代後期の源俊頼の自撰和歌集『散木奇歌集』にある「花すすきまそほの糸をくりかけて絶えず人を招きつるかな(散木奇歌集・秋・八月・四一七)」にある「まそほの糸をくりかけて」に似た用法である「ますほの糸をくりさらし」で、先述の糸などが乱れているような様子のすすきである「まそをのすすき」を詠んでいる。「しろたへ」は白や、白いものの意。「くりさらし」は糸を繰り、日に晒しての意。「さぼす」は、「日に晒す」「干す」で、同意の語が重なっている。「をすすき」は「小薄」の意で、この「小」は単に語調を整えるために使用したものではないかと思われる。一句から四句は「はなのをすすき」の比喩である。

秋ふるす霜より後のきくの色をかねてますほのをばなにぞみる
(秋を見捨てて降りる冬の霜より後も咲く菊の色を前もってますほの尾花の色に見ていたのだ。)

この歌は「をばな」が尾花(馬の尾のように長い穂の薄)を意味し、「ますほのをばな」が先に示した「ますほのすすき」を詠んでいるものと捉えられる。

「秋ふるす」は秋を見捨てること。霜は冬の季語。菊の花は他の秋の花がしおれ枯れてしまった後に依然として咲いている。ここでは白菊を意味し、その白い色を前もってますほの尾花の色に見ており、この歌でも、枯れてしまった色だからであろうか、ますほの尾花を白色と見なしている。

長明が歌語「ますほのすすき」に関する知識を譲り受け、「ますほのすすき」、「まそをのすすき」、「まそこのすすき」という三種類の歌語を忠実に再現した三首の和歌を詠んだということは、歌語「ますほのすすき」に対する長明のこだわり、そして、それを聞きあてた登蓮への尊敬や憧れの念が浮かび上がる。尚、歌語「ますほのすすき」を詠んだ和歌はこれまでに十五首程度あり、代表的なものを以下に挙げておく。

すぐるふすくるすの小野の糸薄まそほの色に露やそむらん
(夫木和歌抄・巻第十一・秋部二・権中納言長方卿・四四一八)

花すすき月の光にまがはまし深きますほの色に染めずば
(山家集・上・秋・西行上人・三八六)

やまどりのますほのすすきうちなびきおもふこころはきみによりにき

(如願法師集)

歌語「ますほのすすき」を詠んだ和歌がこれまでに十五首程ということは、それほど多く詠まれているとはいえないが、十五首程の内、三首が長明の詠んだ和歌であるということは、長明がいかにも「ますほのすすき」に関する知識に対してこだわりを見せていたかということへ結び付く。

ところで、歌語「ますほのすすき」を用いた和歌は多くは無いものの、「ますほのすすき」にまつわる登蓮の逸話に関しては、いくつかの書に伝承されているのでそれらを見ていくこととしたい。

長明、登蓮と同じ時代に生存していたと思われる平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての歌僧である顕昭の歌論書『散木集注』には、

薄

花薄ますほの糸をくりかけてたえずも人をまねきつるかな(四一七)

ますほのいと、おぼつかなし。人々たづぬれど、たしかにいひきたれることなし。

登蓮といふ人、そのかみ天王寺に此の事知る人ありとき、てわざとゆきてとぶらひき。

眞蘇芳と云ふことを略なり。承和菊を略してそが菊と云ふがごとし。薄のほは蘇芳色なれば如此よめるなりと云々。經盛卿云、まそと云ふ芋あり。色の黄ばみたるなり。薄のほはいづるはじめ、件の芋の色に相似云々。或人云、黄色といひつべし。萬葉云、まがねふくにふのますほの色にいでと讀り。このまがねをば眞金といひて、金篇に類聚萬葉には入れたり。然ばますほの色をば黄色と可得意歟。顯昭云、まがねふくきびの中山と云ふ歌につきて鐵とのみいひ傳へたり。金をいふべからず。金を

鴨長明と登蓮法師 杉本

眞がねといふ事ぞおぼつかなき。而萬葉歌は、にふは播磨の所名なり。然ば彼所のまそと云ふ歟。まその色さらにまがねの色によるべからず。まそは芋なり。夫を糸といはむ事ぞおぼつかなきに、或人云、あなかのものは糸をまそといふと云々。其の事まことならば薄のほの糸に似たれば、糸をよりかけてまねくとぞよみたるにもやあらむ。和歌の難義といふは、日本紀、萬葉、三代集、諸家集、伊勢・大和兩物語、諸家歌合、神樂、催馬樂、風俗等の詞などにある詞をぞ、むねと尋ね勘ふることにてあるに、このますほの糸は件等書にまたく見えず。たゞ俊頼計よみたれば、とてもかくてもありぬべし。非大事歟。

(『日本歌学大系 別巻四』風間書房 一九八〇年)

と、述べられており、これは顕昭が寿永二年(一一八三)十月七日に、守覚法親王に奉ったものであるから、長明の『無名抄』よりも時期が早く、顕昭は長明よりも前に登蓮の話を知り記したことになる。また、内容を見てみると、顕昭は最後に「俊頼計よみたれば、とてもかくてもありぬべし。非大事歟」としており、「ますほのすすき」という歌枕の解釈を長明のように大切に扱っていないように思われる。また、顕昭は、『袖中抄』においても、登蓮について批判している。^(注四)

顕昭の生没年は平安時代末期から鎌倉時代初期(大治五(一一三〇)年頃か、承元元(一一〇九)年頃か)とされており、長明と同様に顕昭も登蓮と同時期に生存している。顕昭は登蓮の教寄話を耳にして、自身の著書にて紹介はしたものの、長明が持っているような登蓮への尊敬の念は持ち合わせていないように思える。

さらに、登蓮の教寄逸話は、室町時代中期の連歌師である心敬の連歌論書『ささめごと』の中では、

登蓮法師はますほの薄にこと尋にとて、雨の夜の明るを待たず、蓑笠借りて、渡辺に行きしとなり。その座の人「慌たゞしや」と言へば、「人の命は明日を待つものか」と言へるとなり。

〔歌論歌学集成 第十一卷〕三弥井書店 二〇〇一年)

と、述べられており、また、室町時代から戦国時代の連歌師である猪苗代兼載の連歌論書『兼載雑談』には、

ますほの薄、まそをのす、きの分別、よくしりたる人の津の国渡辺に有とき、て、登蓮法師、雨の夜行てたづねし事あり。

〔歌論歌学集成 第十二卷〕三弥井書店 二〇〇三年)

と、あるので、この話は長年にわたって人々に語り継がれていたと思われる。心敬や猪苗代兼載は、登蓮の数寄話を単に先人の逸話として紹介しているにすぎず、長明のように登蓮に対する感情を表してはいない。しかし、兼好法師は登蓮の数寄ぶりを逸話としてだけでなく、多少の感情を入れて述べている。鎌倉時代末期に成立したとされる、兼好法師の随筆『徒然草』の第一八八段を見てみたい。

或者、子を法師になして、「学問して因果の理をも知り、説経などして世渡るたづきともせよ」と言ひければ、教のまゝに、説経師にならんために、先づ、馬に乗り習ひけり。輿・車は持たぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎へにおこせたらんに、桃尻にて落ちなんは、心憂かるべしと思ひけり。次に、仏事の後、酒など勧むる事あらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふことを習ひけり。二つのわざ、やうやう境に入りければ、いよいよよくしたく覚えて嗜みけるほどに、

説経習うべき隙なくて、年寄りにけり。

この法師のみにあらず、世間の人、なべて、この事あり。若きほどは、諸事につけて、身を立て、大きな道をも成じ、能をも附き、学問をもせんと、行末久しくあらます事ども心には懸けながら、世を長閑に思ひて打ち怠りつゝ、先づ、差し当りたる、目の前の事のみに分れて、月日を送れば、事々成す事なくして、身は老いぬ。終に、物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども取り返さるゝ、齢ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。

されば、一生の中、むねとあらまほしからん事の中に、いづれか勝るとよく思ひ比べて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨てて、一事を励むべし。一日の中、一時の中にも、数多の事の来らん中に、少しも益の勝らん事を営みて、その外をば打ち捨てて、大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと心に取り持ちては、一事も成るべからず。

例へば、碁を打つ人、一手も徒らにせず、人に先立ちて、小を捨て大に就くが如し。それにとりて、三つの石を捨てて、十の石に就くことは易し。十を捨てて、十一に就くことは難し。一つなりとも勝らん方へこそ就くべきを、十まで成りぬれば、惜しく覚えて、多く勝らぬ石には換へ難し。これをも捨てず、かれをも取らんと思ふ心に、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。

京に住む人、急ぎて東山に用ありて、既に行き着きたりとも、西山に行きてその益勝るべき事を思ひ得たらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。「此所まで来着きぬれば、この事をば先づ言ひてん。日を指さぬ事なれば、西山の事は歸りてまたこそ思ひ立ため」と思ふ故に、一時の懈怠、即ち一生の懈怠となる。これを恐るべし。

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るゝをも傷むべからず、人の嘲りをも恥づべからず。万事に換へずしては、一の大事成るべからず。人の数多ありける中にて、或者、「ますほの薄、ますほの薄など言ふ事あり。渡辺の聖、この事を伝へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師、その座に侍りけるが、聞きて、雨の降りけるに、「蓑・笠やある。貸し給へ。かの薄の事習ひに、渡辺の聖のがり尋ね罷らん」と言ひけるを、「余りに物騒がし。雨止みてこそ」と人の言ひければ、「無下の事をも仰せらるゝものかな。人の命は雨の晴れ間をも待つものかは。我も死に、聖も失せば、尋ね聞きてんや」とて、走り出でて行きつゝ、習ひ侍りにけりと申し伝へたるこそ、ゆゝしく、有難う覚ゆれ。「敏き時は、則ち功あり」とぞ、論語と云ふ文にも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

〔『新日本古典文学大系 三九』岩波書店 一九八九年〕

この話は『徒然草』の中でも著名な章段であり、前半は、生涯の間に数ある理想の中からどれを優先すべきかをよく比較検討して、第一にするべき事を決定し、それ以外は投げ捨てて優先事項を励むべきなのだということについて語られており、後半は、ひとつのことを成し遂げようと思うならば、他のことがダメになることを躊躇してはいけない、人の嘲りをも恥ずかしいと思つてはならず、万事を犠牲にしなれば、ひとつの大事なことは達成できないのだ、と兼好は主張し、登蓮の逸話を引用し、「ゆゝしくありがたく覚ゆれ。（大変素晴らしいことで稀有である。）」とし、論語の話「敏き時は、則ち功あり（迅速にすれば、成功する）」を持ち出して、最終的には、「この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。（この薄のことを知りたいと登蓮が思ったように、乗馬や早歌にうつつを抜かし

た僧侶も、悟りを開く仏道修行を第一に思わねばならなかったのだ。）」と、仏教に結び付けている。

しかし、兼好の生没年は弘安六（一二八三）年頃かゝ文和元（一二三二）年以後とされており、登蓮の没後百年を経て兼好は生存している故、兼好にとつて登蓮はなにか、大昔の伝説の数寄者と認識していた印象がぬぐえない。ゆえに、兼好が登蓮に対して、登蓮と同時期を過ごした長明のような尊敬の念を表しているようには見えな

い。

次に「井手の山吹並びに蛙」を見ていきたい。

ある人語りていはく、「この縁ありて、井手といふ所にまかりて、一宿つかまつりたること侍き。ところのありさま、井手河の流れたる体、心も及び侍らず。かの井手の大臣の跡なれば理なれど、河に立ち並びたる石なども十餘丁ばかり、さのみかは遠く立て置きけむ、石ごとにたゞなほざりのこととは見えず、わざと立てたるやうになん侍しを、ここに古老の者を語らひて、むかしの事ども尋ね侍しついでに、『井手の山吹とて名に流れたるを、いと見え侍らぬは、いづくにあるぞ』と尋ね侍しかば、『さる事侍り。かの井手の大臣の堂は、ひと、せ焼け侍にき。その前に、おびたゞしく大きな山吹、むら／＼見え侍き。その花の輪はこかはらけの大きさにて、幾重ともなく重なりてなん侍し。それをさやうに申おきて侍にや。又、かの井手河の汀につきてひまもな

く侍しかば、花ざかりには、黄金の堤などを築きわたしたらんやうにて、他所にはすぐれてなん侍し。されば、いづれを申けるにか、今わき難く侍り。たゞし、下臈のいふかひなく侍ことは、かく名高き草とて所もおき侍らず、『田つくるには、草を刈り入れたる

がよく出で来る』と申て、何ともなく刈り取り侍し程に、今は跡もなくなむなりて侍る。

それにとりて、井手のかはづと申ことこそ、やうあることにて侍れ。世の人の思ひて侍は、たゞ蛙をばみなかはづといふぞと思ひて侍り。それも違ひ侍らず。されど、かはづと申蛙は、ほかにはさらに侍らず、たゞこの井手河にのみ侍なり。色黒きやうにて、いと大きにもあらず、世の常の蛙のやうに、あらはに踊り歩くことなどもいと侍らず、常には水にのみ棲みて、夜ふくる程に彼が鳴きたるは、いみじく心澄み、物あはれなる声にてなん侍。春夏の頃、必ずおはして聞き給へ』と申侍しかど、その後とかくまぎれて、いまだたづね侍らず』となん語り侍し。

このこと心にしみて、いみじく覚え侍しかど、かひなくて三年にはなり侍りぬ。また年だけは歩みなはずして、思ひながらいまだかの声を聞かず。かの登蓮が雨もよに急ぎ出でけむには、たとしへなくなむ。これを思に、今より末さまの人は、たとひおのづからことのとよりありて、かしこに行きのぞみたりとも、心とめて聞かんと思へる人も少なかるべし。人の数寄と情とは年月に添へて衰へゆくゆゑなり。

この話は、直前の「ますほのすすき」にある、登蓮を「いみじかりける数寄者なりかし」とする内容を受けて書かれた話であり、章段前半は、「ある人」が井手の地に赴いた際に土地の古老から聞いたという「井手の山吹」の現状と「井手の蛙」の実態についての話が紹介される。ここで、長明が用いた表現を見ても「十余丁ばかり」など、具体的な詳細な数値表現があり、実際の現地における強いこだわりが感じられる。後半で長明は、この話を「心にしみて、いみじくおぼえていたのだが、三年たつても井手を訪れることはなく、「井手の蛙」

に対して興味を抱いた自らの思いを実行に移せないままにいる。それはこの章段直前の「ますほのすすき」の章段の逸話にある登蓮の実行力とは比べものにならない差異であり、長明は自分自身を「雨もよに急ぎ出でけむには、たとしへなくなむ」としている。そこから、後世には井手の地に赴いても「蛙」の声を聞こうとする人は少なくなるだろうとし、その理由を、時代が下るに従って「数寄と情」が衰退することに求めている。後半の「井手の蛙」についても長明はむしろ現場に赴いて蛙の鳴き声を聞いたかったのだろうが、まだ訪れていない自分の不甲斐無さを嘆く長明の心の声が聞こえてくるようである。最後の一文である「人の数寄と情とは年月に添へて衰へゆくゆゑなり」に、長明の「数寄」への想いは年月が経つと共に衰える、だからこそ尊いのだという「数寄」への純粋な思いや憧れが見てとれ、井手に行きたくて仕方がないのにまだ足を運んでいない、ということと長明は自分自身を責めているのである。

長明は「ますほのすすき」の章段で、雨の日にわざわざ薄の話聞くために、出向いて行った登蓮を「いみじかりけるすすき物なりかし」と紹介し、「井手の山吹並びに蛙」の章段でもそのことに触れており、長明は同じ時代を生きた先輩であろう登蓮を、数寄者として憧れ、大変尊敬しているように見受けられるのである。

さらに「近代の歌体」を見ていきたい。

近代の歌体

ある人問ひていはく、「この頃の人の歌さま、二面に分かれたり。中頃の体を執する人は、今の世の歌をばすすろごとのやうに思ひて、やや達磨宗などいふ異名を付けて誇り嘲る。またこの頃様を好む人は、中頃の体をば、『俗に近し。見どころなし』と嫌ふ。やや宗論のたぐひにて、こときるべくもあらず。末学のため、是

非に惑ひぬべし。いかか心得べき」といふ。

ある人答へていはく、「これはこの世の歌仙の大きな争ひなれば、たやすくいかか定めむ。ただし、人のならひ、月星の行度をも悟り、鬼神の心をも推し量るものなれば、おぼつかなくとも心の及ぶほど申し侍らむ。また思はれむに従ひてことわらるべし。」

大方、このことを人の、水火のごとく思へるが心も得ず覚え侍るなり。すべて歌のさま、世々に異なり。昔は文字の数も定まらず、思ふさまに口に任せていひけり。かの『出雲八重垣』の歌よりこそは、五句、三十文字に定まりにけれど、万葉の頃などまでは、なほねんごろなる心ざしを述ぶるばかりにて、あながちに姿言葉を選ばざりけるにやと見えたり。中頃、古今の時、花実ともに備はりて、そのさままぢまぢに分かれたり。後撰には、よろしき歌古今に取りつくされてのち幾ほども経ざりければ、歌得がたくして、姿をば選ばず、ただ心を先とせり。拾遺の頃よりその体ことのほかにもの近くなりて、ことわりくまなくあらはれ、姿すなほなるをよろしとす。そののち後拾遺の時、今少し、やはらぎて、昔の風を忘れたり。ややその時の古き人などはこれを請けざりけるにや、後拾遺姿と名づけて、くちをしきことにしけるとぞ、ある先達語り侍りし。金葉はまた、わざともをかしからむとして、軽々なる歌多かり。詞花・千載、大略後拾遺の風なるべし。歌の昔より伝はり来たれるやう、かくのごとし。

かかれば、拾遺よりのち、そのさま一つにして久しくなりけるゆゑに、風情やうやう尽き、言葉世々に古りて、この道時に随ひて衰へゆく。昔はただ花を雲にまがへ、月を氷に似せ、紅葉を錦に思ひ寄するたぐひををかしきことにせしかど、今はその心いひつくして、雲の中にさまざまの雲を求め、氷にとりてめづらしき

心を添へ、錦にことなる節を尋ね、かやうにやすからずたしなみて思ひ得れば、めづらしき節は難くなりゆく。まれまれ得たれども、昔をへつらへる心どもなれば、卑しく碎けたるさまなり。いはむや、言葉に至りては、いひつくしてければ、めづらしき言葉もなく、目とまる節もなし。ことなる秀逸ならねば、五七五を詠むに、七七は空に推し量らるるやうなり。

ここに、今の人、歌のさまの世々に詠み古されにけることを知りて、さらに古風に帰りて、幽玄の体を学ぶことの出できたるなり。これによりて、中古の流れを習ふともがら、目を驚かして諺り嘲る。しかあれど、まことには心ざしは一つなれば、上手と秀歌とは何方にもそむかず。いはゆる清輔・頼政・俊恵・登蓮なども、よく詠みつるをば謗家も謗ることなし。えせ歌どもに至りては、またいづれもよろしからず。中頃のさしもなき歌をこの世の歌に並べてみれば、化粧したる人の中に尼顔にて交はるることならず。今の世のいとも詠みおほせぬ歌は、あるいはすべて心得られず、あるいは悪気はなはだし。されば、一方に偏執すまじきことにこそ。」

問ひていはく、「今の世の体をば新しく出できたるやうに思へるは、ひがことにて侍るか。」

答へていはく、「この難はいはれぬことなり。たとひ新しく出できたりとても、かならずしも悪かるべからず。唐土には限りある文体だにも世々に改まるなり。この国の小国にて、人の心はせの愚かなるにより、もろもろのことを昔に違へじとするにてこそ侍れ。まして、歌は心ざしを述べ、耳を喜ばしめむためなれば、時の人の翫び、好まむに過ぎたることやは侍るべき。いかにいむや、さらにさらに今巧み出でたることにあらず。万葉まではこ

と遠し。古今の歌どもをよくも見分かぬ人の、この難をばし侍るなり。かの集の中にさまざまの体あり。しかあれば、中古の歌の姿も古今より出でたり。また、この幽玄のさまもこの集より出でたり。たとひ今の姿を詠みつくして、また改まる世ありとも、ざれこと歌などまでも漏らさず選び載せれば、なほかの集をば出づべからず。これを一向に耳遠く思ひて誇り卑しむは、ひとへに中古の歌のさまに封ぜられたるなり。

問ひていはく、「この二つの体、いづれか詠みやすく、また秀歌をも得つべき」。

答へていはく、「中頃の体は学びやすくして、しかも秀歌は難かるべし。言葉古りてしかも風情ばかりを註とすべきゆゑなり。今の体は習ひがたくて、よく心得れば詠みやすし。そのさまめづらしきにより、姿と心とにわたりて興あるべきゆゑなり」。

問ひていはく、「聞くがごとくならば、いづれも良きは良し、悪きは悪かなり。学者はまた、われもわれもと争ふ。いかがしてその勝劣をば定むべき」。

答へていはく、「かならず勝劣をば定むべきことかは。ただ何方にも、よく詠めるをよしと知りてこそは侍らめ。

ただし、寂蓮入道申すこと侍りき。『この争ひ、やすくこときるべきやうあり。そのゆゑは、手を習ふも、「劣りの人の文字は学びやすく、われよりあがりさまの人の手跡は習ひ似すること難し」といへり。しかあれば、われらが詠むやうに詠めといはむには、季経卿・顕昭法師など、幾日案ずとも、えこそ詠まざらめ。われはかの人々の詠むやうには、ただ筆さし濡らして、いとよく書きてむ。さてこそことはきらめ』とぞ申されし。

人のことは知らず、身にとりては、中頃の人々あまたさし集まりて侍りし会に連なりて、人の歌どもを聞きしには、わが思ひ至

らぬ風情はいと少なかりき。わが續けたりつるよりは、これはよかりけりなど覚ゆることこそありしかど、いささかも心の廻らぬことはありがたくなむ侍りし。しかあるを、御所の御会につかうまつりしには、ふつと思ひも寄らぬことをのみ人ごとに詠まれしかば、この道ははやく底もなく、際もなきことになりけりと、恐ろしくこそ覚え侍りしか。

されば、いかにもこの体を心得ることは、骨法ある人の、境に入り、峠を越えてのち、あるべきことなり。それすらなほし外せば、聞きにくきこと多かり。いはむや風情足らぬ人の、いまだ峰まで登り着かずして、推し量りに学びたる、さるかたはらいたきことなし。化粧をばすべきことと知りて、あやしの賤の女などが、心に任せてものども塗り付けたらむやうにぞ覚え侍りし。かやうのたぐひは、われとはえ作り立てず、人の詠み捨てたる言葉どもを拾ひて、そのさまを学ぶばかりなり。いはゆる、『露さびて』、『風ふけて』、『心の奥』、『あはれの底』、『月の有明』、『風の夕暮れ』、『春の古里』など、初めめづらしく詠める時こそあれ、ふたたびともなれば念もなき言癖どもをぞ僅かに学ぶめる。あるはまた、おほつかなく心籠りて詠まむとするほどに、はてにはみづからもえ心得ず、違はぬまた無心所着になりぬ。かやうの列の歌は、幽玄の境にはあらず。げに達磨ともこれらをぞいふべき」。

問ひていはく、「この趣はおろおろ心得侍りにたり。その幽玄とかいふらむ体に至りてこそ、いかなるべしとも心得がたく侍れ。そのやうをうけたまはらむ」といふ。

答へていはく、「すべて歌姿は心得にくきことにこそ。古き口伝・髓脳などにも、難きことどもをば手を取りて教ふばかりに積したれど、姿に至りては確かに見えたることなし。いはむや、幽玄の体、まづ名を聞くより惑ひぬべし。みづからもいと心得ぬことなれば、

定かにいかに申すべしとも覚え侍らねど、よく境に入れる人々の申されし趣は、詮はただ言葉に現れぬ余情、姿に見えぬ景気なるべし。心にも理深く、言葉にも艶極まりぬれば、これらの徳はおのづから備はるにこそ。

たとへば、秋の夕暮れの空の景色は、色もなく、声もなし。いづくにいかなるゆゑあるべしとも覚えねど、すずろに涙こぼるるがごとし。これを心なき列の者は、さらにいみじと思はず。ただ目に見ゆる花・紅葉をぞ、めで侍る。また、よき女の、恨めしきことあれど、言葉に現はさず、深く忍びたる気色を、さよとほのぼの見付けたるは、言葉を尽して恨み、袖を絞って見せんよりも、心ぐるしうあはれ深かかるべきがごとし。これまた、幼き者などは、細々(こまこま)と言はすより外に、いかでか気色を見て知らん。すなはち、この二つの譬へにて、風情少なく、心浅からん人の、悟り難きことをば知りぬべし。

また、幼き子のらうたきが、片言かたこととして、そことも聞こえぬ事言ひゐたるは、はかなきにつけても、いとほしく聞きどころあるに似たることも侍るにや。これらをば、いかでかたやすくまねびもし、定かに言ひもあらはさむ。ただ、みづから心得べきことなり。

また、霧の絶え間より、秋の山を眺むれば、見ゆる所はほのかなれど、奥ゆかしく、『いかばかり紅葉わたりて面白からむ』と限りなく推し量らるる面影は、ほとほと定かに見んにも優れたるべし。

すべては心ざし言葉に現れて、月を『くまなし』といひ、花を『たへなり』と讃めむことは、何かは難からん。いづくかは、歌のただ物いふに勝る徳とせん。一言葉に多くのことはりを込め、現はさずして、深き心ざしを尽し、見ぬ世の事を面影に浮かべ、卑し

きを借りて優を表し、愚かなるやうにて、妙なる理を極むればこそ、心も及ばず、言葉も足らぬ時、これにて思ひを述べ、わづかに三十一字がうちに、天地を動かす徳を具し、鬼神を和むる術にては侍れ」。

この話は、『無名抄』の中でもかなり長い章段で、長明の歌論が展開されている内容から重要であると捉えられている。この章段で長明は問答体を用いて、「中頃の体」すなわち古今和歌集の頃の歌風と、最近の歌風の対比・対立について論じている。形としては、ある二人による問いと答えからなり、それは俊恵と長明のような特定の人物間の対話としておらず、この表現技法は抽象的な議論を客観的にするための工夫であろうと思われる。

ここでも長明は、「しかあれど、まことには心ざしは一つなれば、上手と秀歌とは何方にもそむかず。いはゆる清輔・頼政・俊恵・登蓮などが詠みくちをば、今の世の人も捨てがたくす。(けれども本当のところは良い和歌を詠みたいという心は同一であるから、名人と秀歌とはどちらにしても違わない。世間でよくいわれている藤原清輔、源頼政、俊恵、登蓮などの詠みぶりは、今の世の人も捨てがたいものとする。)」と、登蓮を、藤原清輔、源頼政、俊恵と同等に扱い、尊敬の念を顕にしているのである。

四、『発心集』にある登蓮の話

長明の書いた仏教説話集である『発心集』の「蓮花城、入水の事」の章段には、前半にある蓮花城の入水譚に登蓮を登場させている。以

下に引用し、詳しく見ていきたい。尚、テキストには、慶安四年刊本を用いた。^(注五)

『発心集』卷三十八

蓮花城、入水の事

近き比、蓮花城と云ひて、人に知られたる聖ありき。登蓮法師相ひ知りて、事にふれ、情をかけつつ過ぎける程に、年比ありて、此の聖の云ひけるやうは、「今は年にそへつつ弱くなり罷れば、死期の近付く事、疑ふべからず。終り正念にて罷りかくれん事、極まれる望みにて侍るを、心の澄む時、入水をして終り取らんと侍る」と云ふ。登蓮、聞き驚きて、「あるべき事にもあらず。今一日なりとも、念仏の功を積まんとこそ願はるべけれ。さやうの行は、愚癡なる人のするわざなり」と云ひて、いさめれど、更にゆるぎなく思ひ堅めたる事と見えければ、「かく、是程思ひ取られたらんに至りては、留むるに及ばず。さるべきにこそあらめ」とて、其の程の用意など、力を分けて、もろともに沙汰しけり。

終に、桂河の深き所に至りて、念仏高く申し、時へて水の底に沈みぬ。其の時、聞き及ぶ人、市の如く集まりて、しばらくは、貴み悲しむ事限りなし。登蓮は、「年ごろ見なれたりつるものを」と、あはれに覚えて、涙を押へつつ帰りにけり。

かくて、日比ふるままに、登蓮、物のけめかしき病ひをす。あたりの人あやししく思ひて、事としける程に、霊現はれて、「ありし蓮花城」と名のりければ、「此の事げにと覚えす。年ごろ相ひ知りて、終りまで更に恨みらるべき事なし。況や、発心のさま、なほざりならず、貴くて終り給ひしにあらずや。かたがた何の故にや、思はぬさまにて来たるらん」と云ふ。物のけの云ふやう、「其の事なり。よく制し給ひしものを、我が心の程を知らで、云ひか

ひなき死にをして侍り。さばかり、人の為の事にもあらねば、其のきはにて思ひかへすべしとも覚えざりしかど、いかなる天魔のしわざにてありけん、まさしく水に入らせんとせし時、忽ちにくやしくなんなりて侍りし。されども、さばかりの人中に、いかにして我が心と思ひかへさん。『あはれ、ただ今制し給へがし』と思ひて目を見合はせたりしかど、知らぬがほにて、『今はとくとく』ともよほして沈みてん恨めしさに、何の往生の事も覚えす。ずろなる道に入りて侍るなり。此の事、我が愚かなる過なれば、人を恨み申すべきならねど、最期に口惜しと思ひし一念によりて、かくまうで来たるなり」と云ひける。

是こそ、げに宿業と覚えて侍れ。且は又、末の世の人の誠めとなりぬべし。人の心はかりがたき物なれば、必ずしも清浄・質直の心よりもおこらず。或いは勝他名聞にも住し、或いは憍慢・嫉妬をもととして、愚かに、身燈・入海するは浄土に生るるぞとばかり知りて、心のはやるままに、かやうの行を思ひ立つ事し侍りなん。即ち、外道の苦行に同じ。大きな邪見と云ふべし。其の故に、火水に入る苦しみなめならず。其のころざし深からずは、いかがたえ忍ばん。苦患あれば、又心安からず。仏の助けより外には、正念ならん事、極めてかたし。中にも、愚かなる人のことくさまで、「身燈はえせじ。水にはやすくしてん」と申し侍るめり。則ち、よそ目なだらかにて、其の心知らぬゆゑなるべし。或る聖の語りしは、「彼の水に溺れて、既に死なんと仕りしを、人に助けられて、からうして生きたる事侍りき。その時、鼻・口より水入りて責めし程の苦しきは、たとひ地獄の苦しみになりとも、さばかりこそはと覚え侍りしか。然るを、人の水をやすき事と思へるは、未だ、水の人殺す様を知らぬなり」と申し侍りし。

或る人の云はく、「諸々の行ひは、皆我が心にあり。みづから

勤めて、みづから知るべし。よそにははからひがたき事なり。すべて過去の業因も、未来の果報も、仏天加護もうち傾きて、我が心の程を安くせば、おのづからおしはかられねべし。且々、一事を頭はず。もし、人、仏道を行はん為に山林にもまじはり、ひとり曠野の中にもをらん時、なほ身を恐れ、寿を惜しむ心あらば、必ずしも、仏擁護し給ふらんとは憑むべからず。垣・壁をもかこひ、遁るべきかまへをして、みづから身を守り、病ひを助けて、やうやうすすまん事を願ひつべし。もし、ひたすら仏に奉りつる身ぞと思ひて、虎・狼来たりて犯すとも、あながちに恐るる心なく、食ひ物たえて、餓え死ぬとも、うれはしからず覚ゆる程になりなば、仏も必ず擁護し給ひ、菩薩も聖衆も来たりて、守り給ふべし。法の悪鬼も毒獣も、便りを得べからず。盗人は念を起して去り、病ひは仏力によりて癒えなん。是を思ひ分かず、心は心として浅く、仏天の護持をたのむは、危ふき事なり」と語り侍りし。此の事、さもと聞こゆ。

この話は、前半と後半に分かれており、前半は、鎌倉時代の歴史書である『百鍊抄』の、安元二（一一七六）年八月十五日の条に「十五日。上人十一人入水。其中稱蓮華淨上人者爲發起。」とある、蓮花城という僧の入水譚で、もうすぐ自分が死んでしまうことを悟った蓮花城は、安らかに死ぬために自ら川に身を投げることを決心する。蓮花城と仲が良かったと思われる登蓮は入水をやめさせようとするのだが、蓮花城の決意が固かったために最終的には協力することにした。入水の当日、蓮花城は念仏をとえながら川に身を投げる。蓮花城の入水のうわさを聞きつけて川にやってきた人たちも皆、蓮花城の死に涙を流した。数日後、登蓮のもとへ蓮花城の霊がやって来て、安らかに死んでいったはずなのになぜだろうと思う登蓮に、蓮花城は「実は、死ぬ直

前に怖くなり登蓮に止めて欲しいと思つて目を合わせたが、登蓮は止めるどころか入水を急かした。それで自分の意に反して入水してしまつたので極楽往生できず、ここへ来た」と語つた話で、長明はこれを、入水すれば極楽往生できると思つている人が多いが、それは誤りだと記している。

後半では仏天の護持について述べ、「心は心として浅く、仏天の護持をたのむは、危ふき事なり（覚悟の無い心のままで、佛に守つてもらおうと考えるのは、危ない事である）」について、「此の事、さもと聞こゆ（此の事は、そのとおりである）」としていいる。この章段で長明が強調して述べたかつた事柄は「心は心として浅く、仏天の護持をたのむは、危ふき事なり」という後半部分であり、前半部分は後半部分を引き出すための導入話にすぎない。そうすると、前半の入水譚の登場人物は特に大きな意味を持たないと考えることが出来る。しかし、あえて長明はこの話に登蓮を登場させている。このあたりからも、長明がいかに登蓮を特別視し、数寄者として尊敬の念を抱いていたゆえに『発心集』にも登蓮を登場させていたのではないかということ、窺い知ることができるのである。

五、登蓮は長明にとってどのような存在であったのか

以上、『無名抄』や『発心集』を通して、長明が登蓮に対して数寄者としての憧れや尊敬という特別な感情を持つていたことを考察した。今後は、長明が登蓮に対して認めていた「数寄」という概念が、時代と共にどのように変化していったのかを具体的に考察していきたいと考えている。

注

- 一. 『鴨長明「すき観」の一考察』(『成蹊人文研究 第二十三号』二〇一五年三月 成蹊大学)
- 二. 拙稿『鴨長明「すき観」の一考察』(『成蹊人文研究 第二十三号』二〇一五年三月 成蹊大学)に詳しい。
- 三. 多数の写本が存在し、主な伝本として、東京国立博物館蔵梅沢記念館旧蔵の鎌倉時代書写本(梅沢本)、天理図書館蔵竹柏園(佐々木信綱)旧蔵(天理本)、天理図書館蔵呉文炳旧蔵(呉本)、築瀬一雄蔵(築瀬本)、静嘉堂文庫蔵脇坂安元・松井簡治旧蔵(静嘉堂本)などが挙げられる。
- 四. 拙稿『鴨長明「すき観」の一考察』(『成蹊人文研究 第二十三号』二〇一五年三月 成蹊大学)に詳しい。
- 五. 『発心集』の伝本には、流布本と異本という、二つの系統がある。流布本は全八巻・一〇二話であるが、現存しない三巻本が最も原型に近いと考えられている。他に五巻六二話の異本もある。伝本に古写本は無く、慶安四年片仮名本と寛文十年平仮名本が版本として刊行された流布本であり、神宮文庫本が五巻の近世写本である。

参考文献

- 『國史大系第拾四巻』経済雑誌社 一九〇〇年
 『日本繪巻物集成第二十二巻』雄山閣 一九三二年
 築瀬一雄『校註鴨長明全集』風間書店 一九五六年
 佐々木信綱編『日本歌学大系 第一巻』風間書房 一九五八年
 佐々木信綱編『日本歌学大系 第二巻』風間書房 一九五八年
 佐々木信綱編『日本歌学大系 第三巻』風間書房 一九五八年
 久松潜一『日本古典文学大系六五』岩波書店 一九六一年

- 築瀬一雄『発心集研究』加藤中道館 一九七五年
 『日本古典文学全集五〇歌論集』小学館 一九七五年
 『新訂増補國史大系』普及版▽日本紀略』吉川弘文館 一九七九年
 久曾神昇編『日本歌学大系 別巻四』風間書房 一九八〇年
 築瀬一雄『無名抄全講』加藤中道館 一九八〇年
 築瀬一雄『鴨長明研究』加藤中道館 一九八〇年
 『新訂増補國史大系』普及版▽百鍊抄』吉川弘文館 一九八一年
 三木紀人校注『方丈記 発心集』新潮社 一九八五年
 高橋和彦『無名抄全解』双文社 一九八七年
 井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』笠間書店 一九八八年
 『新日本古典文学大系 三九』岩波書店 一九八九年
 『鴨長明全集』貴重本刊行会 二〇〇〇年
 『歌論歌学集成 第十一巻』三弥井書店 二〇〇一年
 『歌論歌学集成 第十二巻』三弥井書店 二〇〇三年
 木村健「終末期のすきもの登蓮法師」(『國學院雑誌』一九七六年四月 國學院大學)
 三木紀人「第三章 発心集―長明、川、西方など」(『岩波講座日本文学と仏教 第三巻』一九九四年三月 岩波書店)
 紙宏行「歌林苑の歌学論議―登蓮法師の逸話から―」(『文教大学国文学会 第三十九号』二〇一〇年三月 文教大学国文学会)

Kamo no Chōmei and Toren

Ayumi SUGIMOTO

Abstract

Kamo no Chōmei (1155?-1216) was a Japanese author, poet (in the waka form), and essayist. His works are 『Hojoki』, 『Hosshinsyu』 and 『Mumyosyo』. He witnessed a series of natural and social disasters, and, having lost his political backing, was passed over for promotion within the Shinto shrine associated with his family. He decided to turn his back on society, took Buddhist vows, and became a hermit, living outside the capital. This paper describes what the key concept of Kamo no Chōmei's feeling for Toren.

キーワード

鴨長明、登蓮法師、『無名抄』、『発心集』